

富士山測候所は 8 月 31 日に閉所し、62 日間にわたる夏期観測活動を終了しました

実施プロジェクトは前年比約 1.5 倍に増加、7 月 25 日には 2007 年に夏期観測を開始以降の利用者数が延べ 5000 人を達成

認定 NPO 法人富士山測候所を活用する会は、8 月 31 日（土）10:25 に富士山測候所の商用電源を切断し、閉所しました。13 年目の夏期観測となった今年は、62 日間の観測期間に対前年比約 1.5 倍の 42 プロジェクトを実施し、延べ 425 人が参加しました。研究成果は 2020 年 3 月開催予定の第 13 回成果報告会で発表する予定です。

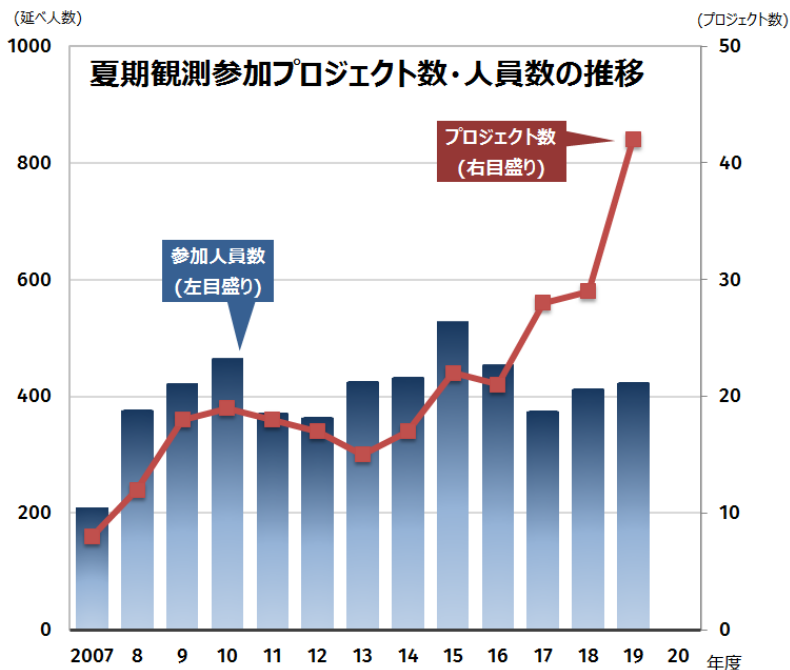
NPO 法人富士山測候所を活用する会は、気象庁から富士山測候所庁舎の一部を借り受け、毎年 7 月・8 月に公募で選ばれたグループの研究・活用に供しています。昨年 8 月に締結した第 4 期借受契約後初の夏期観測となった今年は、42 プロジェクト（継続: 30 プロジェクト、新規: 12 プロジェクト）が実施され、対前年比 145%と飛躍的な増となりました。なお、延べ利用者数は前年より微増の 425 名（対前年 102%）で、7 月 25 日には 2007 年に NPO 法人として観測を開始以降の延べ参加人員が 5 千人を達成しました。
（別紙 夏期観測 2019 プロジェクト一覧 参照）

トピックスとしては、ライブカメラをストリーミングによるリアルタイム動画配信にしたことにより、雲や雷の研究面で飛躍的な進化を遂げたとともに、HP へのアクセス解析結果では富士山頂を目指す登山者の利用も非常に多いことがわかり、安全登山面でも寄与していることが実証できました。また、火山活動の監視をするための研究として、微小電力による長距離通信の特長を生かし H₂S と SO₂ の越年モニタリング結果をリアルタイムで配信することを試みており、その成果が期待されています。その他、複数の高所医学研究グループの参加があったほか、来年度利用に向けての現地調査などのトライアル利用も実施され、次年度のさらなる利用拡大につながるものと想定されています。

今年度のプロジェクトの一部は、一般財団法人新技術振興渡辺記念会殿からの受託、および一般財団法人 WNI 気象文化創造センター殿・気象文化大賞の助成により実施されました。

なお、研究環境としては 5 月に御殿場市街地に通年で事務所を開設し、業務運営の効率化と利用者の利便性の向上を図ったほか、山頂、太郎坊に次ぐ御殿場地区における第 3 の観測拠点としての活用も開始しました。期間中の電源に関しては、大型台風などの強風の影響で 7 月 23 日および 8 月 16 日の 2 度にわたり山頂庁舎が 6 時間以上停電となる事故が発生したほかは、特に大きな障害もなく安定供給が図られました。また、昨年来懸案となっていた山頂庁舎の補修工事も夏期観測と並行して実施され、中長期的なインフラ施設の維持を図っています。

夏期観測の研究成果につきましては、すでに 8 月中に国際学会で発表した研究もありますが、9 月から HP 上で順次速報するほか、2020 年 3 月開催予定の第 13 回成果報告会で発表する予定です。



夏期観測2019プロジェクト一覧

●研究公募

2019/8/1

認定NPO法人富士山測候所を活用する会

ID	研究テーマ	代表者名	分野	区分	プロジェクト概要	チューター/相談者	利用場所	観測時期	
								夏期(7月-8月)	冬期(9月-6月)
R01	富士山頂における長期二酸化炭素濃度観測	寺尾有希夫 (国立環境研究所)	大気化学	継続	2009年から開始された富士山頂での大気中CO2濃度の観測から、富士山頂の大気中CO2濃度の解析からアジア域のCO2の吸収源と排出源の動向を検証できることが明らかとなった。したがって、アジア域のCO2の吸収源と排出源の動向を長期モニタリングするために、富士山頂での大気中CO2濃度観測を長期継続させる。また温室効果ガス(CH4やN2O)の長期観測するために富士山頂でのフラスコサンプリングの長期実施体制を構築させる。	山頂	○	○	
R02	日中韓同時観測による長距離輸送されたPM2.5/PM10の化学組成解明	米持 真一 (埼玉県環境科学国際センター)	大気化学	継続	中国における大気汚染物質は改善が見られるが、長距離輸送による日本や韓国への影響が懸念されている。本研究では、東アジア地域のPM2.5の長距離輸送現象や夏季の関東地域の大気汚染への影響を解明するために、富士山頂において、PM2.5の連続自動採取装置を用いて採取し、主に金属元素成分に着目した化学組成分析を行う。試料採取は日本(埼玉県加須市、東京都新宿区)、中国(北京市、上海市)、韓国(済州島)で同時に行う。なお、本年はPM10に特化した観測を実施する。	山頂	○	○	
R03	富士山頂を利用したエアロゾルの気候影響の研究	三浦 和彦 (東京理科大学)	大気化学	継続	基礎生産性の高い海域から放出される生物起源気体は、海洋エアロゾル粒子の重要な起源である。粒子数が増加することにより、雲は大気中の放射強制力を増すが、大気境界層には海塩粒子が存在するので新粒子生成は起こりにくく、自由対流圏で生成されると思われる。富士山頂は年間を通して自由対流圏内に位置することが多いが、大気境界層内の影響を無視することができない。山頂および太郎坊において同時に、エアロゾル粒子の粒径分布、雲凝結核数、小イオン濃度、ラドン濃度の測定、個々の粒子の元素分析を行い、それらの関係について調べる。	山頂 太郎坊	○	○	
R03-1	山岳域を利用した偏光OPC観測ネットワークによる越境輸送大気エアロゾル観測	小林拓 (山梨大学)	大気化学	継続	越境輸送された大気エアロゾルを監視するために、山岳域を利用した偏光OPCによる観測ネットワークの一地点として、夏期は富士山頂に、通年にわたり太郎坊に偏光OPCを設置し観測を実施する。	山頂	○	○	
R03-2	富士山頂におけるナノ粒子の粒径分布の測定	東秀憲 (金沢大学)	大気化学	継続	昨年引き続き、富士山頂にNano-SMPSを設置し、粒径3 nm~65 nm程度の微小粒子を計測することで、富士山頂における新粒子生成過程の考察を行う。また、今年度もナノゾナを併設することで、粒径別フィルタ上に分級捕集した粒子の化学組成の分析を試み、富士山頂にて観測されるナノ粒子の起源についても検討する。	山頂	○	○	
R04	富士山頂における窒素酸化物の観測	和田龍一 (帝京科学大学)	大気化学	継続	富士山頂旧測候所に窒素酸化物分析装置(化学発光法)を設置し、富士山頂大気中の窒素酸化物濃度の連続観測を行う。窒素酸化物は、光化学スモッグの主要成分であるオゾンの濃度に影響を及ぼし、また酸性雨の原因となる硝酸の前駆体物質であることから大気環境問題における重要な化学種となる。本計画では、富士山頂にて観測した窒素酸化物濃度から東アジアからの越境汚染に関する知見を得る。	山頂	○	○	
R05	富士山頂を利用した自由対流圏高度におけるエアロゾル-雲-降水相互作用の観測	大河内博 (早稲田大学)	大気化学	継続	大気中水溶性ガス・エアロゾル連続観測システムを開発して自由対流圏高度に位置する富士山頂で観測を行い、日本上空のバックグラウンド濃度を明らかにする。また、越境汚染あるいは夏季の斜面上昇流に伴う山麓の汚染気塊(国内汚染)の流入に伴うバックグラウンド大気汚染の特徴を明らかにする。さらに、雲水の観測を行い、エアロゾル-雲-降水相互作用をフィールド観測により解明する。	山頂 太郎坊	○	○	
R06	富士山頂における一酸化炭素、オゾン、二酸化硫黄の夏季の長期測定 ※WNI気象文化大賞助成	加藤俊吾 (首都大学東京)	大気化学	継続	富士山頂の測候所に一酸化炭素(CO)計、オゾン(O3)計、二酸化硫黄(SO2)計を設置し、大気中濃度の連続測定を行う。COは汚染大気輸送の指標となる。O3は汚染大気中の光化学反応の進行度合いについての指標となり、実際に大気環境に悪影響を与える物質である。また二酸化硫黄(SO2)は化石燃料燃焼以外にも火山から放出され、噴煙の影響をとらえることができるため、防災の観点から通年観測が望まれる。小型小電力のセンサーによるこれらのガス測定テストも行い、商用電源が利用できない期間での観測を目指す。	山頂 CO, O3 山頂 SO2 太郎坊 SO2	○	○	
R06-1	キャビティリングダウン分光法を用いたガスの自動連続測定	Chang-Feng Ou-Yang (台湾国立中央大学)	大気化学	新規	温室効果ガスと大気汚染物質を富士山測候所とLulin山で自由対流圏のアジア域代表性の数値として考える事ができるか調査する。そして、その後、シミュレーションモデルにおいて再現できているか確認をおこなう。観測方法は、PICCARO社のキャビティリングダウン分光法による測定装置を用いて、温室効果ガスである二酸化炭素(CO2)とメタンガス(CH4)を自動連続観測を行う。	山頂	○	○	
R07	発達した積乱雲による対流圏から成層圏への物質輸送の研究	岩崎紀 (防衛大学校)	気象	継続	成層圏に達するまで発達した積乱雲の頂上には噴水のように飛び上がることがある。本研究の目的は、この噴水が対流圏から成層圏にどれほど多くの水蒸気を輸送するかが見積もることである。これを観察するため、気象衛星ひまわり8号、富士山測候所の屋上に設置したカメラ、地上レーザによる同時観測を行う。カメラは複数台用意し、それぞれが同期したインターバル撮影により積乱雲の雲頂の発達過程を撮影する。	山頂	○	○	
R08	雷・大気電気チーム 2019年富士山観測	鴨川 仁 (静岡県立大学)	大気電気・雷物理・気象	継続	富士山山頂という高所を活用し大気電気に関連する諸現象の研究を行う。本申請では次の5テーマ、1) 被雷対策具化のために接地系と部材間の接続状況の調査および富士山山頂測定器とした上向き雷の研究、2) 雷活動において発生する高エネルギー放射線、3) スプライトをはじめとする高高度大気中における放電現象および雷活動、4) 新型広帯域大気電場測定機器の試験、5) 越冬時地吹雪時の大気電場変動の調査、を行う。	山頂 御殿場	○	○	
R08-1	高所建築物における被雷対策研究および富士山頂を測定器とした雷の研究 ※新技術振興渡辺記念会受託調査研究 ※研究センター研究	佐々木一哉 (弘前大学)	雷	継続	本研究では、被雷時にどの程度の落雷電流が流れるか計測し、理想的な接地を構築する。また、落雷電流を送電線接地線上のロコスコープで測定することにより、送電線全体を計測線とした山頂規模の高感度雷放電検知器で雷活動を観測する。現象としてはまれである上向き対地雷の前駆現象など従来の観測ではし得なかった雷研究に挑戦する。	山頂	○	○	
R08-2	雷放電・雷雲活動において発生する高エネルギー放射線	David Smith (カリフォルニア大学サンタクルース校)	雷・放射線物理学	継続	雷活動起源の放射線(ガンマ線エネルギー領域の制御X線)の発生機構の解明を目的とする。富士山頂では、放射線源から近距離であるため明るい雷放射線が検知でき、また多数の気象・大気電気観測があるため物理機構の解明につながる。	鴨川仁 山頂	○	○	
R08-3	高高度放電発光現象および広域雷活動研究	鈴木智幸 (東海大学)	雷・大気電気学	継続	本研究では、夏季中に発生する下層雲より高高度の富士山の利点を活かした高高度放電発光現象の測定を行い、気象と現象発生との関係、現象の微細構造の起因など、高確率で検知できる富士山頂の利点を活かした観測を行う。同時に、グローバル雷放電位置評定ネットワークBlitzortungに参画すべく、太郎坊および山頂にて越冬観測を行い日本周辺の落雷位置評定の検知率を上げ、高高度放電発光現象の観測や雷活動と気象・気候変動の研究を行う。	鴨川仁 山頂(高高度) 山頂(広域雲) 御殿場(広域雲)	○	○	
R08-4	新型広帯域大気電場測定機器の実証実験	工藤剛史 (音羽電機工業)	大気電気・気象	継続	晴天静穏時の微弱電場と雷雲による強電場のどちらも同時測定できる計測器を音羽電機と東京学芸大学で共同開発した。その測定器の過酷環境下における実証実験を行う。	鴨川仁 山頂	○	○	
R08-6	富士山頂を活用した災害時LPWA通信の検討	湯瀬裕昭 (静岡県立大学)	防災	新規	LPWA (Low Power, Wide Area) の通信規格である LoRa を用いて山頂に送信局を設置した場合、山間部等の携帯電話の電波環境が悪い地域においても通信ができるかどうか実証実験を行う。	鴨川仁 山頂	○	○	
R08-7	富士山頂における火山噴火予測のための全磁力測定のフィジビリティスタディ	長尾年恭 (東海大学)	防災	新規	富士山頂において噴火予測に資する全磁力観測を目指す。その第1段階として測定機器動作フィジビリティを測候所内で行う。データ転送はLPWA通信のSONY社ELTRESを用いる。	鴨川仁 山頂	○	○	
R09	富士山頂における氷核活性微生物の探索	村田浩太郎 (静岡県立大学)	雲物理・生物学	継続	空気中に存在する微生物は生物氷核核としてはたらくことで雲物理に関与している可能性がある。しかし、観測ベースでの情報は極めて少なく、上空に存在する微生物種や、それらの氷核核としてのはたらきの有無はほとんど明らかになっていない。そこで、富士山頂において空気中の浮遊微生物を採取し、培養あるいは遺伝子解析による組成解析をすることで、上空微生物叢の特徴を明らかにする。くわえて、採取した微生物培養株について、氷核活性を液滴凍結法によって調査する。	鴨川仁 山頂 大河内博	○	○	
R10	宇宙線ミュオンによる富士山山頂近辺の内部構造の探索	後藤 聡 (山梨大学工学域土木環境工学科)	地質学・宇宙線物理学	継続	予兆のない水蒸気爆発で人命が失われた御嶽山、草津白根山の火山災害は、従来の火山観測手法の限界を示した。特に甚大な被害が予想される富士山の小規模水蒸気爆発に対する直接監視法の確立は喫緊の課題である。粒子線検出器を富士山中腹太郎坊ブルドゥーザー基地に設置し、宇宙線ミュオンを用いて富士山頂火口、宝永火口を含む表層近傍の内部構造と地下水分布を調べ、その挙動を長期的に監視することにより、水蒸気爆発に対する変化の予兆を検出するために開発中の山体透視技術を実地検証する。	三浦和彦 大河内博 鴨川仁 太郎坊	○	○	
R11T	地上と富士山頂における一滴ごとの雨水・雲水定量分析 ※トライアル研究	南齋勉 (静岡理工科大学)	大気化学	新規	雨滴中成分の詳細な時間変化を捉える【一滴ごとの雨滴成分の定量分析手法の開発】を目指す。本研究ではゲル薄膜に含まれる溶質と雨中の成分による結晶生成を利用することで、一滴の雨滴の成分を簡便に定量する手法を開発する。また、【実環境試料のフィールド測定】として、地上と富士山山頂において雨水と雲水のサンプリングをそれぞれ行ない、濃度分布を比較する。	山頂 太郎坊	○	○	

ID	研究テーマ	代表者名	分野	区分	プロジェクト概要	チューター/相談者	利用場所	観測時期	
								夏期(7月-8月)	冬期(9月-6月)
R12	高所滞在中の血行動態に自律神経が及ぼす影響についての検討	小森孝洋 (自治医科大学)	高所医学	継続	高所滞在中の血行動態にはさまざまな因子が影響する。本研究では富士登山中の自由行動下血圧測定を行うとともに、富士山頂で自律神経機能検査として起立性血圧測定を行い、高所滞在中の血圧日内変動と起立性血圧変動、自律神経機能の関係性を明らかにする。	鴨川仁	山頂	○	
R13	富士山頂(3776m)における体幹2点歩行動揺計による歩行バランスの評価と簡易指標の検証	井出里香 (東京都立大塚病院)	高所医学	継続	今年度の研究では富士山頂(3776m)における体幹2点歩行動揺計(3軸加速度・3軸角速度センサー)による歩行バランス機能とFRITおよび主観的なふらつき感による簡易評価法との相関を検証する。また歩行時のふらつきと急性高山病(AMS)の重症度との関連についても検討する。滑落事故の要因となる登山中のバランス機能のモニタリングや体調管理の簡易指標になれば、安全な登山にも貢献できるものと考えている。	鴨川仁	山頂	○	
R14T	急性低圧低酸素曝露が覚醒時および睡眠時の生理心理的指標に及ぼす影響とその順化 ※トライアル研究	林聡太郎 (福山市立大学)	高所医学	新規	本研究は、本邦最高峰への登山活動時の運動強度および心理的变化を計測するとともに、低圧低酸素環境への2日間の安静滞在が、ヒトの覚醒時および睡眠時の反応と順化に及ぼす影響を、生理学的・心理学的指標の関連性から明らかにすることを目的とする。	井出里香 鴨川仁	山頂	○	
R15	富士山頂に流入する酸性ガスおよびPM2.5の分析	竹内政樹 (徳島大学大学院歯薬学研究所)	大気化学	継続	東アジア地域からの越境大気汚染が懸念されている。日本国内に輸送された酸性汚染物質は、自然環境を破壊するだけでなく、我々の健康にも悪影響を及ぼす。従って、越境大気汚染の実態を解明することは、我々が健康に生活していく上で極めて重要である。本事業では、酸性ガス・PM2.5連続モニタを富士山頂で稼働させ、日本国内における越境酸性汚染物質の実態を解明していく。	鴨川仁	山頂	○	
R16	富士山の永久凍土研究：経過観察	池田敦 (筑波大学生命環境系)	雪氷学・気候学	継続	富士山山頂の永久凍土の現状を解明し、その地温変化をモニタリングすることで、将来、気候変化と火山活動の評価につなげることを目的とした研究の一環として、2010年に永久凍土をモニタリングする深さ約10mの観測孔を設置した。2019年度は前年度に浸水と落雷で破損した11m観測孔の復旧作業を行う。	鴨川仁	山頂	○	○
R17	富士山域大気環境の光波センサーによる計測研究	小林高部 (福井大学)	大気化学・物理	継続	富士山領域の大気中の温室効果ガスなどを遠隔計測するための小型で高感度な光波センサーにより観測を行う。炭酸ガス(CO2)、メタン(CH4)、水蒸気(H2O)等の温室効果ガスに加えて、硫化水素(H2S)等の火山噴出ガスの濃度や時間変化を長光路吸収分光法を利用した光波センサーを利用して山頂付近で計測実験を行う。また、センサーの小型で小電力特性から夏季に限定されない通年の観測を実現する条件についても検討する。	鴨川仁	山頂	○	

●活用公募

ID	研究テーマ	代表者名	分野	区分	プロジェクト概要	チューター/相談者	利用場所	観測時期	
								夏期(7月-8月)	冬期(9月-6月)
U01	富士山旧測候所を利用した通信の可能性について	杉崎 広正 (KDDIエンジニアリング)	通信	継続	富士山旧測候所内にau携帯電話用通信設備を設置し、富士山頂付近をau携帯電話エリア化する事で、au携帯電話のトラフィック状況等を分析・研究を行う。	鴨川仁	山頂	○	
U02	富士山頂における携帯電話の高速通信検証とマイクロ通信の品質検証	山本貴之 (ドコモCS東海)	通信	継続	4×4 MIMOとスループット高速化技術(TM4)を導入することによる携帯電話の高速通信検証を実施する。マイクロ伝送の通信帯域を拡張することで高スループット化と通信品質の維持が可能に検証する。	鴨川仁	山頂	○	
U03	総合気象計	鴨川仁 (富士山測候所を活用する会)	気象	継続	共同利用データとしての気象データの観測を行う。		山頂	○	
U03-1	富士山測候所への気象観測データリアルタイム送信システムの設置	吉田一成 (ウェザーニューズ)	気象	新規	旧富士山測候所に気象観測データリアルタイム送信システムを設置し、動作試験をする。山頂以外に設置した同機器とのデータ比較を行う。	鴨川仁	山頂	○	
U03-2	富士登山者のリアルタイム位置情報収集の実証実験	畠中雅弘/一般社団法人富士山プラットフォーム(イネック株)	防災	継続	昨年度と同様に、5合目以上を訪れる登山者への小型ビーコンの全数配布と、これらのビーコンを検知するレーザー機器を富士山噴火時避難ルートマップ上に設定している接続ポイント(5合目以上)の全箇所への設置(50箇所)を実施し、富士山の全登山道(4ルート)において全ての登山者の位置情報をリアルタイムで把握できる情報基盤を構築し、緊急時における登山者の位置を把握。これに追加して本年度は24時間配布で登山者の動向を把握する。	鴨川仁	山頂	○	
U04	3000メートルを超える高所での噴火監視及び防災放送システムの構築	鈴木敏之 (NHK静岡局)	防災	継続	富士山測候所にWEBカメラを設置。富士山が万一、噴火した場合に備えて、噴火の瞬間を撮影できるカメラの設置や、その一報映像を生かした、防災・減災報道をどのように行うかについて検討する。過去2年の設置で確立した方法を生かして、さらにカメラの映像の具体的な活用方法について検討を行う。	鴨川仁	山頂	○	
U05	ネパール高所非電化農村地帯向け風力主体ハイブリッド発電機の実証実験	桐原 悦雄 (産業技術大学院大学)	エネルギー	継続	ネパールの電源確保のため再生エネルギー発電の有効活用を目指して、風力を主にしたハイブリッド発電機を大学及び公共施設に設置した。今後は3000m級山村の電力供給に向けて無電化農村地帯の課題である突風で羽根破損がないか試験・実験を富士山にて実証してネパール山村に展開する。	兼保直樹 太郎坊	山頂	○	
U06T	日本・エクトル外交関係樹立100周年記念友好登山隊 ※トライアル研究	渡邊雄二 (公社)日本山岳会	高所医学	新規	両国山岳会が相互に両国の最高峰を目指して有効登山を行う。その準備として、富士山頂に48時間滞在して登山訓練等を行うとともに、富士山測候所の環境を利用してSpO2計や血圧計などによる身体データを数多く収集・解析し、効率的な高所訓練法の開発を行う。	兼保直樹 井出里香	山頂	○	
U07T	富士山頂教育用ドーム4K映像プロジェクト ※トライアル研究	宮下敦 (成蹊大学)	教育	新規	富士山頂で、雲の動きや天体の動きなどをドーム用4K動画で撮影し、これを用いた初等中等教育における教材開発を行う。	鴨川仁	太郎坊	○	
U09	ライブカメラ	鴨川仁 (富士山測候所を活用する会)	気象	継続	観測期間中、東方向の高解像度動画を記録し、共用データとして観測参加者の利用に供する。		山頂	○	
U10T	富士山頂AIセミナー ※トライアル研究	柳井啓司 (電気通信大)	教育	新規	2013年から富士山頂屋外で行っている情報学に関する講演会を旧測候所内で行うため現地調査をする。	兼保直樹	山頂	○	
U11T	富士山山頂における5G通信の実証実験の可能性について ※トライアル研究	佐々木仁 (ソフトバンク)	通信	新規	富士山山頂における5G通信の実証実験の可能性について 通信 富士山山頂にソフトバンク携帯電話用5G無線機を設置しトラフィック状況、通信品質、新たなサービス提供の実証研究のため、現地調査を行う。	鴨川仁	山頂	○	
U12	ELTRESを用いた富士山頂通年科学計測	加藤俊吾(富士山測候所を活用する会)	通信	継続	SONY社のELTRESを活用し、火山噴火に資する科学データを越冬で取得し通信実験を行う。本実験は前年度の代表者・荒島謙治(SONY)のELTRES通年通信実験を拡大させたものである。		山頂	○	○

●学生公募

ID	研究テーマ	代表者名	分野	区分	プロジェクト概要	チューター/相談者	利用場所	観測時期	
								夏期(7月-8月)	冬期(9月-6月)
S01	富士山山頂における大気生物学のための花粉採取	三木健司 (京都大農学研究科)	大気化学・生物学	継続	植生限界において、比較的大きな生物粒子である花粉粒子を採取し、花粉粒子の高高度飛散の条件を検証する。花粉情報は、測候所において空中飛散花粉を採取し、目視で花粉数のカウント及び識別を行うことで、花粉の特別データを得る。得た花粉データとともに同時系列の気象要素の観測結果を解析し、花粉種・量と花粉輸送環境の関係性を明らかにする。	兼保直樹 鴨川仁	山頂	○	
S02	富士山体を利用したスカイゾノメータによるエアロゾルの鉛直分布観測	桃井裕広 (千葉大学大学院融合理工学専攻)	大気化学	新規	富士山測候所で観測した天空輝度分布を解析することでエアロゾルの鉛直分布を求め、エアロゾルの放射強制力の計算への新しい知見を与える。また、大気清浄下でのモードセンシング装置の校正実験に挑戦し、バックグラウンド大気観測を行うことで衛星データの検証を行う。	三浦和彦	山頂	○	
S03	旧富士山測候所およびその周辺の科学観測を火山防災・減災に活用可能か？	伊藤有羽 (フレイッシュコロニア大学)	防災	新規	旧富士山測候所に既存の観測機材や過去のデータで防災・減災に役立つものの視覚化などを通して、これら設置すべき機材・機能を考察する。同時に、登山者等を対象に意識調査を行い、防災対策をハード・ソフト両面で検討する。	鴨川仁	山頂	○	
							太郎坊	○	